



感動体験の考察：
「深くものに感じて心を動かす体験」の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 颯馬 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017957

感動体験の考察

—「深くものに感じて心を動かす体験」の視点から—

土井 颯馬

1. はじめに

感動という言葉はよく使われている。映画を観て感動した、感動の再会などマスメディアや広告、日常会話での体験談に用いられている。我々は何気なくこの表現を用い、その意味や表す内容を理解しているつもりであるが、感動そのものがそもそも何なのかを改めて考えはしない。自身の体験としては、自分の中から強い感情が湧きあがって突き動かされる感覚、そのきっかけとなったものが自分にとって価値のあるものだと感じる、というものがあつた。これはおそらく感動の体験であり、他に言い表せそうにはないがなぜか感動と言うことに抵抗を感じた。それは「感動」に対して自らが持つイメージと異なっていたためであつた。「感動」と表現することで、どのような体験であれその一言で済ませてしまうような、言葉だけが独り歩きして、本質が見えていないと感じた。これにより、そもそもの感動は、どのような心の動きがあり、人はそれをどう体験しているのか、疑問が生じた。それは何らかの心の現象ではあるが、いったい何が起きているのか。感動のイメージに縛られない、個人の特別な体験について扱い、その人にとっての感動体験とは何なのかについて考察したい。

2. 問題

広辞苑第六版によると感動は「深くものに感じて心を動かすこと」(新村, 2008)である。また、大辞林

では「美しいものや素晴らしいものに接して強い印象を受け、心を奪われること」(松村, 1995)と定義される。これを踏まえて、大出・今井・安藤・谷口(2007)は感動を、情動そのものではなく対象からの影響が非常に強く自身の感情が制御できない心理状態で、それに対する肯定的な評価を表わす総称であるとした。戸梶(2001)によると、感動は一つの感情そのものではなく複数の要素が組み合わさった複雑なものであり、悲しみを伴った感動や喜びを伴った感動というようにある程度の類型が可能であるが、怒りや恐怖の感情とは結びつかない。つまり「前者では深く感じ入ることがあつて心が動かされる」が「後者では心は動かされても深く感じ入ることはない」。感動は喜び、悲しみ、驚き、尊敬の4つに大別され、さらに驚きを伴ったものは、対象となる事象のストーリー性の有無で分けられることが示された。さらにこれらについて包括的な感動の構造モデルを示した(図1)。構造についてはストーリー性の有無で分類されていたが、戸梶(2001)は、基本構造は同じものであるとしている。モデルによると、まず物語の主人公や状況設定を知りそれにまつわるエピソードが加わることで、物語についてのテーマが推論される。このテーマは何らかの形で万人に共通するもの(愛情や友情など)であるため高関与状態が生じる。それによって感情移入や結果への期待が高まる。その後出来事の終りによってその出来事に対する評価がなされ、様々な感情を含んだ感動が喚起

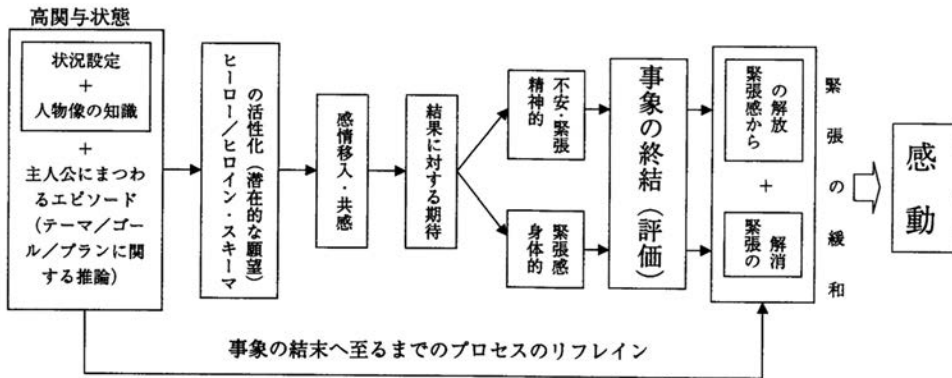


図1 包括的な感動のモデル(戸梶, 2001)

される。

感動は何らかの心の現象ではあるが、何によって感動は感動たり得るのか。感動の体験構造については山根 (2009) が、その構成要素は、対象性、心的動揺、身体的反応の三つであるとしている。感動が単なる喜びや悲しみと区別できるのは固有のクオリア (質感) があるからであり、それは心の動きにあるとした。しかしこの動的な部分についてはその本態をそのまま表現することはできないとも述べている。そのため彼はその運動感を、方向、振幅、強度、快・興奮によって記述できる可能性を示した。方向については、他の感情への水平的動きではなく同一感情における振動であり、それが大きくなっていく加速度的な変化感を表しているものが振幅だとした。強度については、動きの大きさが強さでもありと考えられ、感動が自立した体験になるために他の感情よりも強いものである必要があるという。また、この基準には身体的反応 (涙など) や事後の爽快感などが関連している可能性も示唆された。快・興奮に関しては、基本的に感動体験を肯定的に捉えたり求めたりする姿勢から、不快ではないとしている。そして身体的反応はこの心的動揺に後続して生じ、その中でも典型的な反応として涙を流すことが示されていた。

感動は何らかの対象に依存する心の動きであるため、対象性 (何らかの対象が必要であるという性質) のある現象である。山根 (2009) は対象性の視点から、感動を感性的なものと同義的なものに大別した。前者は芸術作品や風景などの視聴覚的感動を指し、後者は人の行為や心理を描いたものへの感動を指している。ただ、山根によると感動の対象は物自体ではない。真の対象は物が具現している「あわれ」である。「あわれ」は、「個物を超越した普遍的価値」であり、「主体側から投影された情感でもあり、対象に客観的に付随するというより、主体側の意味付けでもある」。

感動の効果については、自己効力感、人間的成長や認知的枠組みの変化、動機付けにも影響を与えることが示されている (畑下・瀬戸, 2012; 中西, 2007; 戸梶, 2004)。

先行研究では感動について、何らかの対象についての感情を伴う心の動きであり身体的な反応が後続すること、その対象もしくは付随する感情によって類型しうることを、感動体験によって人間的な成長や変化が起こり得ることが明らかにされてきた。特に構造については、山根 (2009) の他に戸梶 (2001) によって包括的な感動の構造モデルが提示されている。しかし、佐々木・皆川 (2006) が指摘するように、対象のストーリー

性に焦点を当てた間接的な感動体験をベースにしているため、そうではないものについては言及しきれていない。それを踏まえて佐々木らは実際に経験した感動体験を集めるべく大学生を対象に調査を行ったが、得られた体験は学校に関するものに偏っていた。これは教示の影響 (高校時代というキーワードがあった) だと考察されている。また、戸梶 (2006) においても直接的な感動体験について調査が行われ、それに必要な要因が考察された。ただ、そこで対象となったのは自身-他者間における体験に限定されたものであった。ここでいう間接的と直接的というのは、出来事の中心的事象が自身に直接関係するか否かという視点である。いずれにせよ感動体験はその対象という点で、十分な検討が成されているとは考えにくい。感動は「深くものに感じて心を動かすこと」であるのだから、様々な体験が想定される。そのため、より幅広い体験を検討することが重要ではないか。さらに言えば、個人は感動をどのように体験しているのか、その実際を考察した質的研究は多くない (感動の特殊さや幅広さから対象や状況を限定せざるを得ない可能性も考えられるが)。対象についてだけでなく心の動的な部分についても、記述する試みはあったが十分だとは考えにくい。

感動の研究では、現象としての分類やメカニズムについて焦点を当てたものが多かった。しかし感動体験はその時のみの出来事で完結するものではなく、個人の人生と深くかかわりがあるものだ。対象の性質においても個人によってその価値や視点はことなり、心の動きも異なると考えられる。

3. 目的

個人のオリジナルな体験を集めるために感動体験を「深くものに感じて心を動かす体験」と定義したうえで、体験談を集める。先行研究では感動の対象性と心の動的な部分について研究の余地が残されていたため、集めた体験から、感動の構造について、主にその対象と心の動的な部分について検討・考察を行う。また、個人にとって感動はどのように体験されているのかについても考察を行う。

4. 方法

本研究では大学生に対して、質問紙調査と面接調査を実施した。調査期間は2021年7月～12月。なお、この調査は大阪府立大学現代システム科学域研究倫理委員会の審査を受け、許可を得た上で実施された。調査については以下の通りである。

(1) 質問紙調査

質問紙調査の対象者は大学生95名（男性32名，女性62名，他1名），対象者の年齢は18歳～34歳（平均年齢20.21歳，SD=1.70）であった。手続きは，対面授業にて質問紙を配布する方法とGoogleフォームを用いたオンラインアンケートを使用する方法の2つを用いた。質問紙の内容は，まず「深くもの感じて心を動かす体験」についての質問であることを明記し，【Q1】にて，その体験を「どうしようもないほど強い感情が湧きあがってきて，そのきっかけのものが自分にとって良いものを感じる」，「うまく言えないが，偶然見かけた空き缶に目を奪われてテンションが上がった」，「映画を見てただひたすらに涙を流した」と具体例を挙げて説明したうえで，体験の有無を三件法（ある，ない，判断できない）で尋ねた。次の【Q2】では【Q1】で「ある」もしくは「判断できない」と回答した人を対象に，思い浮かんだ体験の内容を記述してもらった。また，この質問紙調査は面接調査の依頼でもあったため，【Q2】に回答した人向けの依頼書も用意した。

(2) 面接調査

面接調査の対象者は質問紙調査【Q2】に回答し，依頼書に氏名と連絡先の記入があった9名のうち，面接が実現した5名（男性2名，女性3名），年齢は19歳～20歳（平均年齢19.4歳，SD=0.50）であった。他の4名は連絡がつかなかった，日程が合わなかった等により，面接には至らなかった。調査は，大阪府立大学構内A15棟臨床心理実習室にて，調査協力者に対して調査についての確認書を配布し，目的・調査内容・プライバシー・感染症対策などについて説明した上で，同意書にてサインを得た上で実施した。面接は30分～40分程度の半構造化面接で，質問紙にて回答があった体験を自由に語ってもらいながら，①何に心が動いたか②それについて何を感じたか③どのように心が動いたか④なぜ心が動いたのか⑤なぜ特別に感じたか，などを軸に質問をした。この内容は，①，②，③が「深くもの感じて心を動かす体験」について，④，⑤はそれを体験した本人についての質問である。また，言葉以外の表現方法として描画ができるよう，A4サイズのスケッチブック，クレヨン，色鉛筆，マーカーペンを用意した。これらの使用は，事前に描画をお願いすることがあると説明していたが，基本的に調査協力者の自由であった。面接内容は調査協力者の同意の上，ICレコーダーで録音し，逐語録を作成した。その後，事例研究として分析，考察を行った。

5. 質問紙調査の結果と考察

【Q1】「深くもの感じて心を動かす体験」を体験したことがありますか，という質問に対しては95名中，「ある」66名，「ない」20名，「判断できない」7名，無回答2名だった。

【Q2】当該体験について何か思い浮かんだものがあるればその内容を枠内に自由に記述してください，に対しては58名の回答が得られた。自由記述の内容から，ポジティブなものが51名，ネガティブなものが4名，判断のできないものが3名だった。ポジティブかの判断については，戸梶（2001）の感動の4タイプ（喜び・悲しみ・驚き・尊敬）に類似したもの，また，「映画鑑賞」のような記述の少ないものは基本的にポジティブなものとして扱った。

それぞれの内容については以下のようなものが見られた。

ポジティブなもの

- ・インターハイや甲子園など，何かを一生懸命に頑張る姿に胸を打たれます
- ・映画で主人公がある行動をさらっと行っていたのに感動して自分もこうやってみようとか自分もこういう風に意識してこれから生きてみようかなと思う。

ネガティブなもの

- ・ニュースを読んでいて心に巨大な虚無感を覚えた。
- ・どうしようもなく嫌なことがあった日に，お風呂に入って，シャワーを流したとき，シャワーからとめどなく水がでると同じように涙がプワーっと出てきた。

判断のできないもの

- ・歌をきいて，あまりにも自分の状況に当てはまって，何とも言えない感情になって涙がでた。
- ・ショーやパレードを見てよくわからないけど涙が出てくる。

ほとんどがポジティブな体験だったが，ネガティブに感じる記述も一部見られた。「深くもの感じて心を動かすこと」の表記には喜びなどを伴うという条件は明示されていないように見えるため，幅の広い解釈が可能なのだろう。また，判断のできないものについては心が動くことの複雑さや表現しにくさが見てとれる。

6. 面接調査の結果と考察

対象者5名のなかでも，特徴的な2名（Dさん，Eさん）を取り上げて考察する。この2名は，戸梶（2001）の感動モデルとは違った様相が見られたという点で特

徴的であった。そのため、5名の事例についてその構造から、A、B、Cさんのグループ（以後Aグループ）とD、Eさんのグループ（以後Bグループ）に分ける。前者は明確な対象と主体の繋がりや関わりが見られ、対象によって心が動かされているというよく知られた受動的な感動体験の構造である。後者は主体と対象の関係が比較的乏しく、何か対象によって心が動かされている体験とは異なっている。体験のポイントが対象-主体間ではなく主体の心の内にあるようなものである。こちらは、自分で見出したり考えたり、能動的な側面を持ち合わせている。

まずはAグループ3名の体験概要を示し、次にBグループ2名の体験概要と考察を示す。

Aグループ（以下、調査協力者の語りは「」）

(1) Aさんの事例概要

映画『永遠のゼロ』を観る時の体験。特攻隊員として死に行く姿や心情に共感し、深い悲しみがありながらも涙を流した。その中でも特に命がかかった重みのある思いに対して心が動かされていた。また、自身の祖父が他界したことも重ねて語っていた。Aさんの体験は同じ映画を何度も観て類似の体験を繰り返しているもので、想起された内容は本人の中で一般されたものであったと考えられる。命がかかった場面でのセリフから登場人物の強い意志を感じ取り、心が動いたのだと考えられる。

(2) Bさんの事例概要

幼少期に母親と一緒に『宝塚歌劇』を観て以来通い続け、観るとストレスなどを忘れて元気になるという体験。ストーリーに感情移入することもあるがもっとも注目している点としては演者の頑張っている姿であった。この点からBさん独自の視点が垣間見える。元気になれるというのもその演者の姿を見ているからではないか。また、母親との思い出があり、特別な背景があるからこそ心が動くものになり得るのではないか。

(3) Cさんの事例概要

動画を見た時、子犬を膝に乗せた時に涙を流した体験。それぞれの体験では感情や様々な思いがいっぱいになり涙となって溢れ出ていた。Dさんにとっての心が動くことは涙と関係が強いと考えられる。

Bグループ

(1)-1 Dさんの事例概要

Dさんは無駄なものが好きで、カーブミラーや点滅信号に目を奪われ、思いを巡らすという体験だった。その中でもカーブミラーが一番好きだという。カーブミラーは、曲がり角の無い一本道や車が通行できない場所にあることもあり、それはカーブミラーの役割から考えると意味のないもの、無駄なものである。Dさんはカーブミラーを見つけるとそのような意味があるのかを考え、無いことに気づくとテンションが上がり、目を奪われると語った。そうして、「なんでここあるんだろう」、「もしかしたら、ここに別の道があって……今はこのカーブミラーは意味ないけど、昔はあったのかな」と、そのカーブミラーの過去に思いを馳せる。Dさんはなぜカーブミラーなのかについて、自然にあるものについてそこにある意味（目的）を考えることは難しいが、人工的なものであれば「人間の意図がはっきりしてる」ため、その場合「あんま無駄なものが無い」といい、「のに、はずなのに、もう、そのカーブミラーとかは割と無駄なものが多いので」と語った。この体験の「一番のポイント」は、「意味がないって気づいた時」だった。「今は意味ないんですけど、過去に、何かしらの背景があって意味があったもの」であるカーブミラーの在り方に美しさを感じると語った。よく擬人化して考えるというDさんはカーブミラーについて「日常的によくあることでもいいけど、その、日の目を浴びてない何かの努力っていうのが、それを僕が、知ったっていうのに価値がある」、「この人は、僕の中では、すごいやつなんだ」と語った。Dさんは「割と無駄なものが好き」であり、趣深さを感じるという。無駄なものに魅力を感じるようになったきっかけとして、大学受験の際に無駄を無くそうとしていたがそれが「しんどく」なり、「クソつまらないな」と感じたことで「あ、無駄な時間って大切なんだ」と気づき、無駄が好きになったと語った。同時に、「無駄なことを愛せる」ようになったことで様々な価値観を「いいや」と思えたとも語った。「他の人の好きなものを、ま、なんていうか、いいねって一僕にとっては別に面白いとは思わないけどーそれは、いいことなんだっていうのが自分の中で、できて。その価値観、が僕にとっては大切です」。その結果、以前よりもいろんなものに好奇心を持てるようになり、失敗を気にせずチャレンジできるようになったという。

(2)-2 Dさんの考察

この語りは、一度きりのエピソードについてはな

く、Aさんと同様に今まで複数回体験されたことの積み重ねについてであった。体験の構造的には毎回の体験は類似のものであるため、Dさんの中である程度一般化されたプロセスが語られたと考えられる。

Dさんは自身の視点について非常に自覚的で、何に興味があり、そのどこに魅力を感じるのかが明確であった。

Dさんが魅力を感じるものとして「無駄なもの」があり、その背景には過去に無駄を切り捨てようとしたことで「しんどく」なり、「無駄」の大切さに気付いたという体験がある。この価値観の変化は現在のDさんに影響を与えているもので、一つの、心が動いた体験と言えるだろう。ただ、これはあくまでカーブミラーに心惹かれる理由なので、何に感じ入り、心を動かしたのかを考える。

一見、現在は意味のないカーブミラーでも、過去には何らかの目的で立てられ、誰かの役に立っていたことは間違いない。それをDさんは「目の目を浴びてない何かの努力っていうのが、それを僕が、知ったっていうのに価値がある」と表現し、美しさを感じていた。それは「無駄なもの」に見えるカーブミラーに込められた意図に気づく体験と言えるのではないか。Dさんが心を動かすものはカーブミラーそのものではなく、込められた意図があるという事実ではないか。この体験における対象は「無駄な」カーブミラーではあるが、心を動かした真の対象は、込められた意図の存在である。どんな動きだったのかについては、やはり言葉に表現することは難しいようだった。Dさんはカーブミラーへの気づきやその過去へ思いを馳せる時間があり同時に美しさを感じている。おそらくこの時が感動の瞬間、心が動いている瞬間だと考えられる。Dさんの体験の特徴はDさんがカーブミラーに込められた意図を能動的に見出そうとする点にある。それによって「無駄なもの」に対する価値観の変化を体験しているのではないか。

(2)-1 Eさんの事例概要

Eさんの体験は、悩みを抱えている時にふとしたことで悩みが解決した、という体験だった。高校2年生の頃、部活動でのめめ事をきっかけに退部したEさんだったが、勉強を頑張ろうと思い過ぎて無理をし、心身ともに調子を崩してしまった。その時のEさんは「自分はなんてできないんだ」、「自分が、できないから」「自分に能力がないから」勉強や日常生活が上手くいかない、と思いつめていたが、ネット上の話や友人の話を書くことで「今精神状態が色々あって～、おかしいか

ら、できなくなってるだけで～、別に自分の能力の問題じゃないんやっていう風に……思えたり」したという。それをきっかけに悩みが晴れ、HSP※の概念も知ったことで、世の中には自分と同じような人もいると気づき、心がほぐれたと語った。Eさんはそのときの心の様子を描画しながら、「悩んでるときは……周りに見えるものが、紫とか、青とかに見えて。なんか、周りにおる人たちが、全員敵に見えたりして」、「まともに言ってることが全部なんていうか、すごい厳しいことに聞こえたりして」、「自分を責めて」しまったと語った。「そこから、色んな考え方に会って、そんな時の心は、あ、久しぶりに笑ったな、みたいな。で、心が、……なんか矢みたいなのが、いっぱい刺さってたのが、何個か取れて傷跡だけになったみたいな、感じで。まだちょっと傷は残ってはいるんですけど。すごい、穏やかになったっていうのと、あと、けっこう、目の前が、比喩無しで、まーけっこう明るくなって視界が広がったみたいな。ちょっとびっくりしましたあはは「笑」と、心の変化を表わした。さらに高校3年生の受験期においても、成績について思い詰め、無理をしてしまうことがあったが、そのときにも「自分は自分のままでいいんや」、「できないことあってあたり前」と、友人やネットの言葉などを通じて思うことが出来たと語った。Eさん曰く「自分は自分でいいんやっていうのを、……思えたのが、いちばんデカイ」とのことだった。また、インタビューに臨むにあたって「自分の生身で体験したことは、やっぱり、その、伝える価値があると思う」と語り、自身の体験を「なんかめっちゃ印象に残ってて……思い込みから脱却出来たみたいな感じのこと。うん、すごいな！って思ってること」、「パラダイムシフト」のようだ、と語った。

(2)-2 Eさんの考察

Eさんにとってこの体験は「思い込みから脱却出来た」体験で、Eさん自身「すごいな！と思ってること」である。Eさんの心の動きは、ある一つの出来事や瞬間によって生じたものではない。Eさんは、色々な考えに出会い、自分は自分でいいと思えた時「目の前が、比喩無しで……明るくなった」、「視界が広がった」というように、心に生じた変化を表現している。また、語りの中では「パラダイムシフト」とも表現されており、非常に劇的なものであったと言える。友人やネット等の言葉による気づきから生じたこの変化は、動的なものと言って差し支えないだろう。様々な刺激に触れたことでEさん自身が「パラダイムシフト」へと方向づけられていったという点で、従来の受動的な感動

とは異なっているようだ。Eさんにとってはその変化が心の動きとして体験されたと考えられる。ではEさんは何に心の動きかしたのか。感動の効果として自己肯定感や動機づけに影響を及ぼし、考え方や認知、価値観を変化させることがある(畑下・瀬戸, 2012; 中西, 2007; 戸梶, 2004)。ただ、Eさんの場合は何かに感動して考えが変化したという表現は適切ではないように感じる。語りの中では「ネットとか友達の話聞いて」とあるが、Eさんはその話に心が動かされたという表現はしていなかった。もちろんそれらの影響はあるが、あくまできっかけに過ぎないだろう。体験を構成する要素ではあるが、心を動かした対象そのものとしては弱いと考えられる。また、面接で語られた内容も何に心の動きかしたのかというのではなく、その時の思いや感じたことといったEさん自身の内面に焦点が当たっていた。つまり、様々な考えに触れたことによる気づきと同時に「パラダイムシフト」が生じたことそのものが心の動きの中心部分であると考えられる。また、Eさんの心が動いた背景には、「なんかやらかな変われへん」という思いから「トライアンドエラー」を繰り返しており、そのような能動的姿勢があったからこそこの体験でもあったと考えられる。これらのことから、Eさんの体験は、対象からの強い影響を想定している受動的な感動体験とは異なるものかも知れない。そういった意味では、はっきり何に対して心が動いた、と表現するのは困難であると考えられる。Eさんの体験は、心の変化が鍵であるように見える。先述のとおり、感動はものの方を変化させようが、「周りに見えるものが、紫とか、青とかに見えて。なんか、周りにおる人たちが、全員敵に見えたり」という状態から、視界が広がり明るい状態になったというのはどういうことなのか。Eさんは心が動いた結果として見え方が変わったのか、それとも見え方が変化したことで心が動いたのか。これはどちらの可能性もある。見え方が変わったのは様々な考えに触れ心が動いたからであり、同時に見える景色が違っていることにも衝撃を受け、その事実を感じ入ったのだろう。あとになって振り返ることで「パラダイムシフト」の体験全体を、心が動いた体験であると認識しているが、その中身は単なる時系列的な変化ではなく、心の現象として複雑なものが見取れた。感動そのものが様々な要素を持ち合わせているために、その体験は複雑なものになると考えられるが、その中でも感動の構成要素から考えると、心的動揺の要素が強く表れていたと考えられる。

7. 総合考察

感動体験の構成要素について、5名の事例から考える。語られた体験は「深くものに感じて心を動かす体験」であるため、この時点で「もの」、「深く感じ入ること」、「心の動き」の3つの要素が想定できる。「もの」は体験における対象で、〇〇に感動したなどの〇〇にあたる。「深く感じる」とは体験の主体が感じたこと考えたことに関係するもので、目を奪われたり夢中になったり共感したりと、その「もの」に対して強く意識が向いている状態が影響を受けている状態、もしくはその両方だと考えられる。「心の動き」に関しては、どんな動きなのかははっきりしないが、体験の主体が「心が動いた」と感じているため、その存在があることは確かだと考えられる。体験における主体の状態(涙が出る、胸が締め付けられるなど)からその瞬間を読み取ることはできるため、その表現をもって「心の動き」とする。ところで、感動において心が動くというのは受動的な「動かされる」というものと能動的な「動かす」というもの、単に事実として「動く」「動いた」とするもの、が考えられるが、先行研究においては基本的に感動を受動的な心の動きであるとしている。なぜ広辞苑では「動かす」と能動的な表現なのか。感動の能動的側面にも注目していく。

その他の要素として「視点」と「背景」が考えられる。「視点」は体験の主体が「もの」の何に注目しているのかというものである。感動体験における対象はあくまで外から見た体験の構造におけるものと、その人が深く感じ入り心を動かしたものは何かという2つの意味(「視点」)でとらえる必要があるだろう。また、「視点」は主体側から対象に向かう要素であると考えられるため、ある種能動的な働きだとも考えられる。さらに、体験の中には、Dさんのような自身の過去の体験やEさんのようなその時の特殊な状況が関連しているものがある。これも心を動かした体験の構成要素だと考えられるので、主体の過去やその時の状況などを体験の「背景」として扱うこととする。

次に、上述の5つの要素「もの」、「深く感じる」、「心の動き」、「視点」、「背景」を仮定した上でBグループの2名の事例について考える。

Dさんは「もの」として意味のないカーブミラーがあると考えられるが、カーブミラーに込められた意図に「視点」があると思われるため、「もの」によって心が動かされたというよりも、Dさん自身が積極的に意味や魅力を見出していると考えられる。ただ、Dさんが自分の意志で心を動かしたわけでもないため、完全に能動的な体験とも言いきれないだろう。さらに「背

景」として受験期の体験がDさんの価値観の根底にあり、無駄なものに価値に気づくという点で、カーブミラーの体験は自身の価値観を確かめるもの、カーブミラーがDさんの価値観を体現している象徴のようなもの、という印象を受ける。再体験だとも考えられる。その要素からも一般的な感動とは異なっている可能性がある。他の要素として、カーブミラーに美しさを感じ、目を奪われたり意図を考えたり、深く感じ入っている様子（「深く感じること」）がある。「心の動き」については、カーブミラーを見つけてから意味の無さに気づいたり意図に気づいたりする過程が動きそのものと捉えられているのではないか。

そしてEさんだが、その語りには明確な対象が見当たらないように感じられた。体験としてはネットや友人の話を聞いて自身に大きな変化が生じたというものであったが、おそらくEさんはそれらの話そのものに心が動いたわけではない。それらはあくまできっかけに過ぎ体験ない。ここでは「もの」はきっかけ以上の影響力はもっておらず、それに「感じ入る」こともあまりないと考えられる。Eさんはきっかけによって生じた気づきから自身の変化を体験している。この気づきの体験は完全に受動的な体験というよりも能動的（自分で心を動かしたわけでもないが）な側面も併せ持ったものではないか。そしてEさんに生じた価値観の変化そのものが「心の動き」だと捉えられると考えられる。

感動体験の構造については山根(2009)が、心的動揺、身体的反応、対象性を示し感動を、対象を感じる→心に動揺が生じる→身体反応があらわれる、という一連の反応で表現している。さらに心の動的な部分は感動現象の本体であり(山根, 2009)、心の動きがどのようなものかについて、心的空間の方向、振幅、強度、快・興奮の要素で記述できる可能性も示唆された。だが、実際に事例でこれらのような要素を見出せたのはDさんの「いっぱいになって溢れる」感覚だけであった。具体的な心の動きそのものを表わすことは難しいと考えられる。感動体験の構造については、Aグループと比較するとかなり似通っていると考えられる。ただ、心的動揺にあたる「心の動き」の要素は具体的に記述できなかったため身体反応などのその時の様子から、心の動きを想定するほかなかった。また、戸梶(2001)も感動喚起に至るプロセスとして包括的な感動の構造モデルを示している。このモデルは(おそらく対象の)ストーリー性の有無によって分けられているが、同じく映画に関する体験のAさんの事例について考えるとその構造は、状況設定・人物像の知識・主人公にまつ

わるエピソードをよく知っているという高関与状態、感情移入・共感という要素に合致した部分が見受けられたものの、このモデルにおいては感動へ至るまでに潜在的な願望の存在や結果への期待といった要素があるため、Aさんの様に何度もそのストーリーに触れている場合にそれらの要素が存在しうるのはわからない。戸梶のモデルは初めてそのストーリーに触れた場合にのみ当てはまると考えられる。

一方でBグループの構造は受け身の体験ではないという点で山根や戸梶のモデルと異なると考えられる。対象とされた「もの」はきっかけでしかなくその影響は必ずしも重要ではない。完全に受動的な体験ではないが、自分の意志で心を動かすというのも正確ではない。ただ能動的な側面はあるため、自己触発的なものだと考えられるのではないか。また、Bグループの事例で言えば身体的反応も語られなかった(面接者の質問不足でなければ)。

5名の体験においてその構造について考察し、対象-主体間で生じる受動的な体験と、そうではなく主体の心の中で生じる自己触発的な体験の2つが考えられたが、感動の本体とされる心の動きについては具体的に表現することが困難であった。しかしその中でも、Dさんのいっぱいになって溢れる感覚は、動きの表現として最も具体的であったと考えられる。また、Dさんの意図に気づく瞬間やEさんの「パラダイムシフト」のような変化そのものも一つの動きの要素だと考えられる。山根(2009)は「感動のクオリア(固有の質感)」を心の動きであるとし、その動きを「外界の刺激に対する受動的な感応・共振」と示したが、Dさん様に積極的に何かを見出したりEさんの様に変わろうとしたり、受動-能動のどちらも言い切れない体験も存在するのではないか。さらに言えば、AグループでもBグループでも「視点」という対象側の影響以外の、主体側からの要素が見られたため、一見受け身の体験であっても能動的な要素と受動的な要素が入り混じった体験になっていたのではないか。受動的な感応や共振がありつつも「視点」のような主体側から対象に向かう能動性を含んだ渾然一体の体験こそが感動の本質なのではないか。

5名の事例それぞれについては、事例ごとに見ることで、様々な主観的体験の様相、感動体験の幅の広さや奥の深さを感じられた。感動体験の構造については、対象-主体間で生じる受動的な体験と、主体の心の中で生じる自己触発的な体験の2つの存在が示唆された。しかし心の動きに関しては、何がどう動いているのかを上手く表現することは困難であった。ただ、

可能性としては感情や思いがいっぱいになって溢れるという感覚やグッとくる感覚、自身が変わる瞬間、といった様子から動いた瞬間をより明確に推測できると考えられる。感動を「深くものに感じて心を動かすこと」としたが、今回5名の事例を通じて、「動かされる」という受動的な体験の他に自分で感じるという能動的な側面を持ち合わせた様相が存在する可能性も示唆された。感動体験は全くの受動的体験ではないという意味も込めて「動かされる」ではなく「動かす」なのだろう。

8. 今後の展望

面接調査を行ったが、協力者によって心の内についての語りが多い場合と自身の外の事象について多く語る場合とがあった。自身の体験を語る人は、おそらくある程度内省的な人であると考えられるが、そのような人においても心の動きを自覚することや表現することは困難であった。より心の動きを明らかにするために、面接者の技量の向上はもちろんだが、協力者に日常生活の中で心が動いた瞬間を詳しく記録してもらうなど、より生きた体験の瞬間を集めることが出来れば、さらに動きの様相が明らかになっていくのではないか。

※ Highly sensitive person の略称。Aron, E.N.により提唱された、刺激を感じる閾値が低く感受性が高い人々のこと。様々な刺激に敏感に反応してしまう(Elaine N. Aron, 1996)。

付記

本稿は、2021年度大阪府立大学現代システム科学域に提出した卒業論文に加筆・修正したものです。

本論文の作成にあたって、熱心なご指導、助言を賜りました。指導教員の片畑真由美准教授に深く感謝いたします。

そして調査に協力して下さった皆様に心からお礼申し上げます。

引用文献

- Elaine N. Aron (1996). The Highly Sensitive Person
畑下真里奈・瀬戸美奈子 (2012). 大学生における感動体験が自己効力感に及ぼす影響, 総合福祉科学研究 (関西福祉科学大学), 3, 97-104
松村 明 (編) (1995). 大辞林第二版 三省堂.
中西良文 (2007). 感動体験の想起が動機づけに及ぼす影響, 日本心理学会第71回大会発表論文集.

- 大出訓史・今井 篤・安藤彰男・谷口高士 (2007). 語彙間の主観的な類似度による感動語の分類, 自然言語処理, 14(3), 81-97.
新村 出 (編) (2008). 広辞苑第六版 岩波書店.
佐々木智美・皆川直凡 (2013). 大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析—自伝的記憶としての感動体験—, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 10, 21-28.
戸梶亜紀彦 (2001). 『感動』喚起のメカニズムについて, 認知科学, 8(4), 360-368.
戸梶亜紀彦 (2004). 『感動』体験の効果について—一人が変化するメカニズム—, 広島大学マネジメント研究, 14, 22-37.
戸梶亜紀彦 (2006). 直接的な感動体験に必要な要因について, 日本心理学会第70回大会発表論文集.
山根一郎 (2009). 感動のクオリア, 人間科学研究, 8, 97-109.

(2023年1月13日受稿, 2023年2月9日受理)